

---

# 不幸な俺の異世界戦記

神速の守

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸な俺の異世界戦記

### 【Nコード】

N2725Y

### 【作者名】

神速の守

### 【あらすじ】

俺を襲った不幸は俺を地獄へと突き落とした。

しかし俺は誰を恨んでいいのかもわからない。

基本アホな主人公、一樹の美月を救うための旅が始まる  
初投稿&amp;#x3a;処女作です。

## プロローグ

俺を襲った不幸は俺を地獄へと突き落とした。

しかし俺は誰を恨んでよいのかもわからない。

不幸はあの日、2人で下校しているときに起こった。

「ねえってば一樹もう許してよ。私が悪かったから許してよ・・・」

「俺にちよつとだけ涙ぐみながら謝ってくるのは幼馴染で同級生の  
篠原美月だ。  
のほらみつき

「許さない」

俺、新崎一葉はそう答えた

「でも先生に追いかけてたんだからしょうがないじゃない」  
んなこと知るかよ・・・

数時間前のことだ

数時間前

俺は学校の屋上で寝ていた。ほかのやつらは授業中だろう。

1時間目からずっと屋上で寝ている。いつものことだ。

ガチャッ

鉄製の重いドアの開く音がした。

見回りの教師か？それにしてはくるのが早い。

携帯を見ながらそう思った俺はそつとドアのほうを見る。

「なんだ美月かよ、脅かすなよ、見回りかと思っ・・・え？」

こっちに走ってくる。

「一樹っ」

俺のほうまで来ると俺の後ろに隠れてしまう美月  
いやな予感しかしないんだが・・・と思ったときだ。

「篠原くいるのはわかってんだぞーでてこーい！」

叫んでいるのは体育のセクハラ教師だ。

（やばい・・・俺見つかると思うくやばい・・・逃げるか！）

あいつはエロい上にウザく話し出したら止まらない。

あいつの視界の影からゆっくり逃げようとしていると三月が

「ちよつとつ助けてくれないの!？」

（バカっ声がでかいっ）

と思ったときにはすでに遅い。お約束だ。

「そこか!・・・新崎お前なにやってるんだ？」

あーサイヤクだ。

「あーそのー・・・寝てました。」

その後1時間も俺はセクハラ教師に怒られた。

・・・美月は逃げていた。

「お前が来なかったらバレなかったんだよ、だから許さん」

「そんなあ許してよ一樹っ」

明日になれば許してやるか、などと思っていた。

今思えばこの時許していればよかった。

「もう!一樹なんか知らない!先帰る!」

「はーいいはい、また明日なっ」

美月を先に帰らせず一緒に帰ればよかった。

許さず先に帰らせてしまった代償は・・・重すぎた。



## ブログ（後書き）

はろろんです。

これからも読もうと思ってくれた人たちヨリシクです（・・、）  
読もうと思わずともブログ読んでくれた人はありがとうございます  
てか皆さんありがとうございます

## プロローグ2

「キヤーーーーーッ!!!!」

悲鳴だった。それは俺がよく知る人物の悲鳴。

美月の声、悲鳴だった。

「嘘だろ・・・」

俺は駆け出していた。

いつも美月と2人で下校している道を駆ける。

（何だよこれは・・・）

アスファルトに道の上に黒く輝く直径2mほどの円状の魔方陣。

そこに美月はいた。捕らわれていた。体が魔方陣に埋まっておりもう肩より上と右腕しか見えていなかった。

「美月!!!!」

俺は叫んで魔方陣の中に飛び込み美月の右手をつかむ。

（どうなってるんだよこれは・・・）

「今助けてやる!」

（どうすればいい、どうすれば・・・）

俺にはただ引つ張ることしかできなかった。しかし魔方陣の中に美月はますます沈んで入った

もう顔と右腕しか出ていない美月は俺にこういった

「もういい、一樹、ご・・・」

しかし何かを言いかけていた美月は魔方陣の中に沈み顔も見えず右手も沈んでいく。

離すものか。離してしまつたら美月は消えてしまう・・・

だがついに握っていた右手も魔方陣の中に沈み込んだ。そして魔方陣がさらに光魔方陣の外に波紋のように何かが広がっていく。10秒ほどすると魔方陣は消え去り俺はアスファルトの上にしゃがみこんでいた。

「美月・・・?どこに行つたんだよ。返事してくれよ・・・美月い

**A**

俺は叫んだ。泣き叫んだ。

周りに人が集まってきた。何かと思っているのだろう。うちの一人が叫んだ

「救急車だっ！誰か電話してくれ！！！」

一樹の体はかまいたちに斬られたかのように斬れていた。

血が流れ出していたが一樹はそんなときずかず泣き叫んでいた。

目を覚ますと白い天井が見える。

「どっだ、  
ーッッ?」

体を起こそうとする。すると体に激痛が走る。

(ぐっ・・何だよの痛みは。)

何とか体を起こして自分の体を見る。包帯が巻かれていた。

周りを見渡す。俺はベットの上に寝かされており腕には点滴の針が刺さっていた。

（病院なのか？でも何でこんなところにいるんだ。）

と思ったときだった。看護婦が部屋に入ってきた

「あつ新崎さんから起こしちゃだめですよ！今先生を呼んできますからっ。」

と言うと看護婦さんは部屋をでていった。

先生が来て脈拍とかを測った後黒いスーツを着た男の人が入ってきた。

「警察の西垣と言うものです。話を聞きたいのだがいいかな？」

（なぜ警察なんてものが来ているんだ？）

「はい。話って何ですか？ていうか何で俺こんなところにいるんですか？」

西垣さんは驚いた表情でこう言った。



「君は学校の帰り道に何者かに襲われたんじゃないのかい？体にはいくつもの傷があつて君はしゃがみこんで叫んでいたと言うことなんだが。」

そういわれて思い出した。

（美月。美月は！？）

「美月はどこですか！？」

「落ち着け！美月とは誰かね。君と一緒にいたのかい？」

「俺と美月が2人で帰つててちよつと言い争つてそれで美月が先に行つて、突然叫び声が聞こえて、それで俺が走つて言ったときにはなんか黒い魔方阵のようなものに美月が吸い込まれていつて・・・それで美月を俺が助けようとしたけど・・・」

西垣がポカンとしていた。いま一樹が言ったことが信じられないのだ。当たり前だ、ここに来るまでに一樹の学校での関係等を調べたが美月と言う名前は出なかつた。2人で帰るほどの中なら名前が出てきてもおかしくない。いや、出てこなければおかしいのだ。それ以前に魔方阵とかそんなものが出てくるというのがおかしかつた。

「君は記憶が混乱しているようだ。本が何かで読んだんじゃないのか？その内容は」

「本当なんです！美月が・・・」

「もういいよ。警察のほうで調べてみる。医者からの説明だとかまいたちに斬られたような斬り跡だったらしいし今日は風が強かつた」  
西垣はそう言うと言つて病室から出て行つた

（そんな・・・いや、俺でもほかのやつからこんなこと聞いてもおかしいと思うか。どうにかしてあの魔方阵のことを調べないと）  
そう思いながら

俺は2週間ほどの入院生活を過ごした。

## ブログ2（後書き）

西垣はもう出てこないんで記憶から消去しちゃってもいいです！  
今回もありでした。

誤字脱字あれば報告してくれるとありがたいです。

## プロローグ3（前書き）

プロローグが終わらない。

### プロローグ3

傷もふさがり退院した俺は美月の家に行った。

「何だよこれ・・・」

表札のに書かれている文字が篠原ではなかった。

（まさかラノベとかでよくある存在自体がなくなるってやつか・・・？）

念のためいますんでいる人に篠原と言う人を知らないかと聞いたが知らないようだった。

それならばと思い向かったのは学校だ。

退院した日なので学校には行っていない。しかし誰がいるだろうとは思った。

学校について向かった先は職員室だ。担任を捕まえて美月を知っているか。と言った。

案の定美月のことは知らなかった。

わかっていたこととはいえ俺は更なる地獄へと突き落とされた気分だった

（美月どこにいるんだよ・・・）

おそらく美月はこの知地球にはいないだろう。あの魔方陣は魔法とかそういう類のものに見えた。

と言うことである。魔方陣を俺は調べることにした。インターネット、歴史の教師、そして図書館。俺の知識じゃそれくらいしか思いつかなかった。歴史の教師は何の役にも立たなかったがネットと図書館は大いに役に立った。

昔のことやら神話やらを中心に図書館の本は片っ端から読み

漁った。ちなみに3週間は図書館に籠った。当然学校はサボりだ。

図書館で調べた中本にこのような神話があった。

戦乱の中で黒く光る円が突如出現し何事もなく消え去る。しかし何人かの兵はあいつがいないと騒ぎ立てた。円に飲まれたんだ、とその兵士達は全身に傷跡ができていた、と言うものだ。

俺はこれを見つけたときにまさかと思った。

（何事もなかったのではなく人が何人か魔方阵に飲まれたとしてもきずかない可能性がある、現に美月が飲まれたとき周りには何人か人がいた。でもそいつらは魔方阵の中には入らなかった。それに美月が消えた後波紋のように黒い何かが広がっていった。あれは魔方阵の中にまでは及ばなかった。波紋は広がり最終的には地球を一周する。あれが記憶改変のできる何かだったとすれば説明は一応つく気がする。何人かの兵が覚えていたと言うのも仲間を助けようと近寄って言ったやつの可能性があるじゃないか）

考えれば考えるほど浮かんできてくる推測。そしてその神話の本の最後のほうのページに信じられない記述を発見した。

戦乱は続いていたがその中で黒い円がまた突如出現した。そこには見たことない鉄の鎧を着た人物が立っていた。そいつは片方の軍に味方をしたちまち負けしていた戦局を建て直しそのまま相手の国を占拠した、と言うものだ。しかしその後にも記述されていた。

その勇者はこの国のものだと言いさらには騎士団長だったと言った。そして自分は未知の世界でモンスターと戦い1つの国を救い向こうでいきなり黒い円にとらわれきずいたときにはここにいたのだと。

しかし勇者のことは誰も覚えておらず勇者として生涯を終えた、と。（これじゃ美月が帰ってきてても覚えているのは俺だけ・・・いくらなんでも美月がかわいそうだ・・・どうすればいい。どうにかして俺が向こうに行けないか・・・）

そして俺は魔方陣の事を調べた。特に召喚系のものをだ。そして3つ見つけた。異世界に行く魔方陣と言うものを。どれも古い本に書かれているものだった。

しかし正直言って俺はこれで異世界に行けるとは考えていなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2725y/>

---

不幸な俺の異世界戦記

2011年11月6日14時46分発行